専門家派遣事業

1988

国際協力事業団
研修事業部

ARY

韓国青年招へい事業

JICA LIBRARY
1073694[0]
19066

1988

青業
JR
89—8

国際協力事業団
19066

序

昭和61年９月に中曽根総理大臣によって提唱されました「韓国青年招へい事業」は本年度第２回目を迎え、教員および学生の合計99名を４グループとして受け入れました。教員は小学校、中学校、高校の３グループ、学生が１グループでした。

１ヵ月の滞在期間中は、講義、視察、機関訪問、合宿セミナー、ホームステイと東京および地方４県に分かれて多様な経験をされました。

本報告書は、各グループの２～３名の青年に記して貰った感想文と日本側の合宿セミナー、ホームステイ参加者の体験談を中心にとりまとめたものであります。

本事業に参加された皆様の思い出のよすがとなり、また参加者の体験をより多くの方々に共有して頂くことを願うものです。

なお、この報告書は韓国語版を併せ作成し、参加青年の皆様にお送りします。

終わりに、本計画に温かいご理解とご協力を惜しまなかった関係者の皆様に心から御礼申し上げます。来年度以降、ますます有意義なプログラムにしていきたいと考えておりますので、引き続きご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成元年３月

国際協力事業団
研修事業部
部長　御手洗　章弘

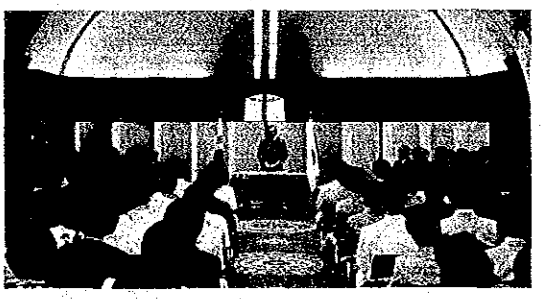
信頼と友情への第一歩

昭和63年度韓国青年招へい事業

▲挨拶の言葉を述べる竹下総理大臣

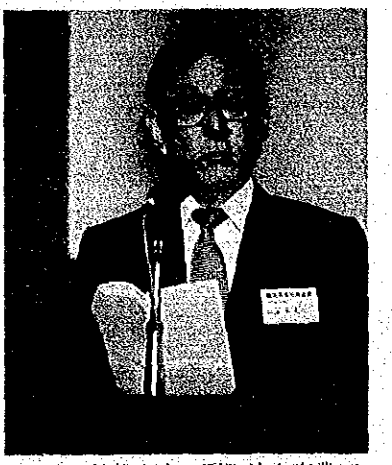
竹下総理大臣表敬

昭和63年8月8日、韓国青年99名は首相官邸に竹下総理大臣を表敬訪問した。



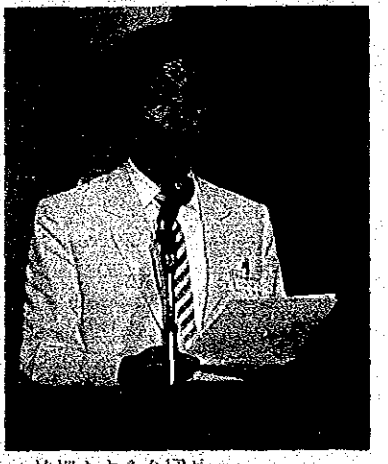
▲竹下総理大臣とともに記念撮影

歓　迎　会



▲歓迎の挨拶をする国際協力事業団
岸副総裁

▲金団長より記念品の贈呈



▲挨拶をする金団長

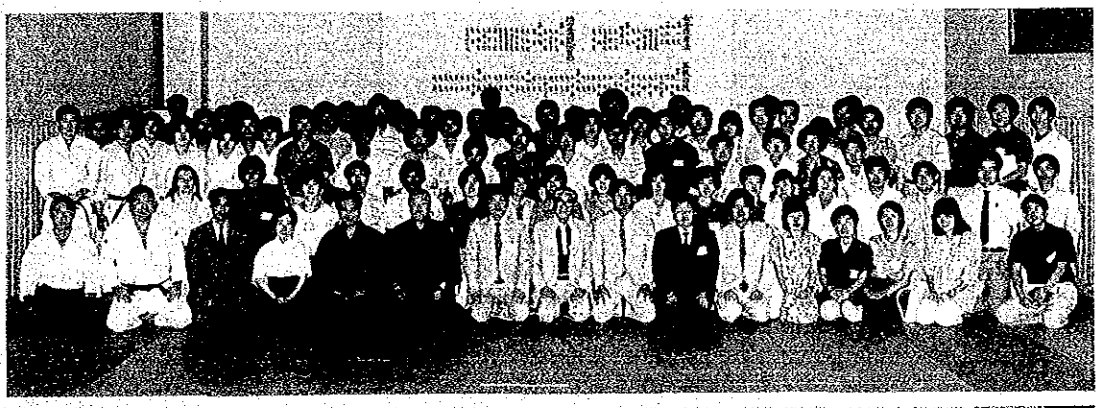
▲「韓国青年招へい事業」の成功を祈って乾杯

共通プログラム

1週間にわたり日本の文化、歴史、経済などに関するオリエンテーションを受けた。

▲リラックスした雰囲気で日本語会話練習

▲講義のようす



▲日本武道館にて武道鑑賞、演武者との記念撮影

都内分野別プログラム

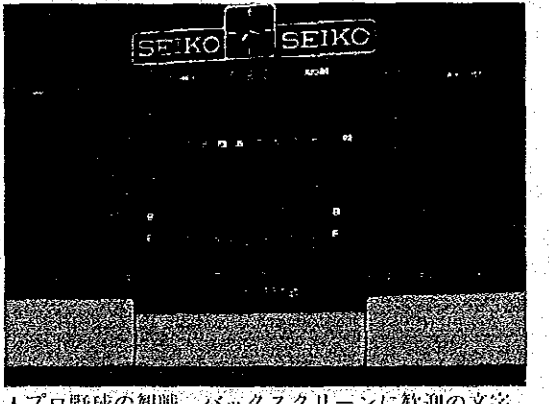
共通プログラムに続いては、4つのグループ（小学校教師、中学校教師高等学校教師、学生）に分かれて、都内の各所を見学し、また合宿セミナーに参加した。

▲見学先で概要説明を受ける

▲キャンパスで学生たちと

▲お茶を楽しむ

▲設備の見学



▲プロ野球の観戦、バックスクリーンに歓迎の文字が浮かぶ

地方分野別プログラム

4つのグループは各実施県を訪問。それぞれの県で、特色あるプログラムをこなし、また、ホームステイに参加した。

▲大学生との交流会

▲絵つけに挑戦

▲地方での歓迎レセプション

▲ホストファミリーとの出会い

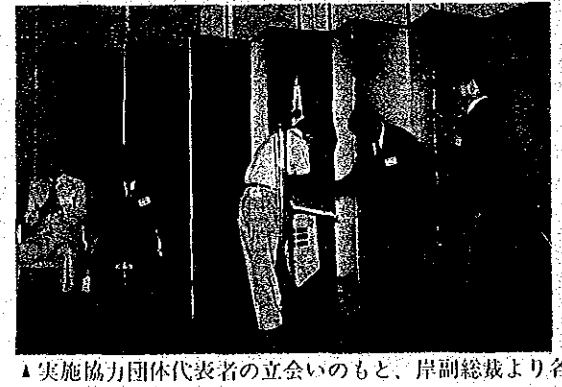
▲祭りを楽しむ

▲駅で見送るホストファミリーとの別れ

歓　送　会

▲挨拶する国際協力事業団
岸副総裁

▲謝辞をのべる金団長



▲実施協力団体代表者の立会いのもと、岸副総裁より各グループの班長に記念アルバムの贈呈

歓送会の余興から

目　　次

序

1．韓国青年招へい事業

(1) 事業の概要 …… 3

(2) 実施協力団体と実施県 …… 5

2．招へい青年の印象 …… 7

3．合宿セミナー参加日本青年の声 …… 19

4．ホストファミリーの思い出 …… 25

〈実績資料〉

1．韓国窓口機関 …… 32

2．現地プログラム実施機関 …… 32

3．現地プログラム実施日程 …… 32

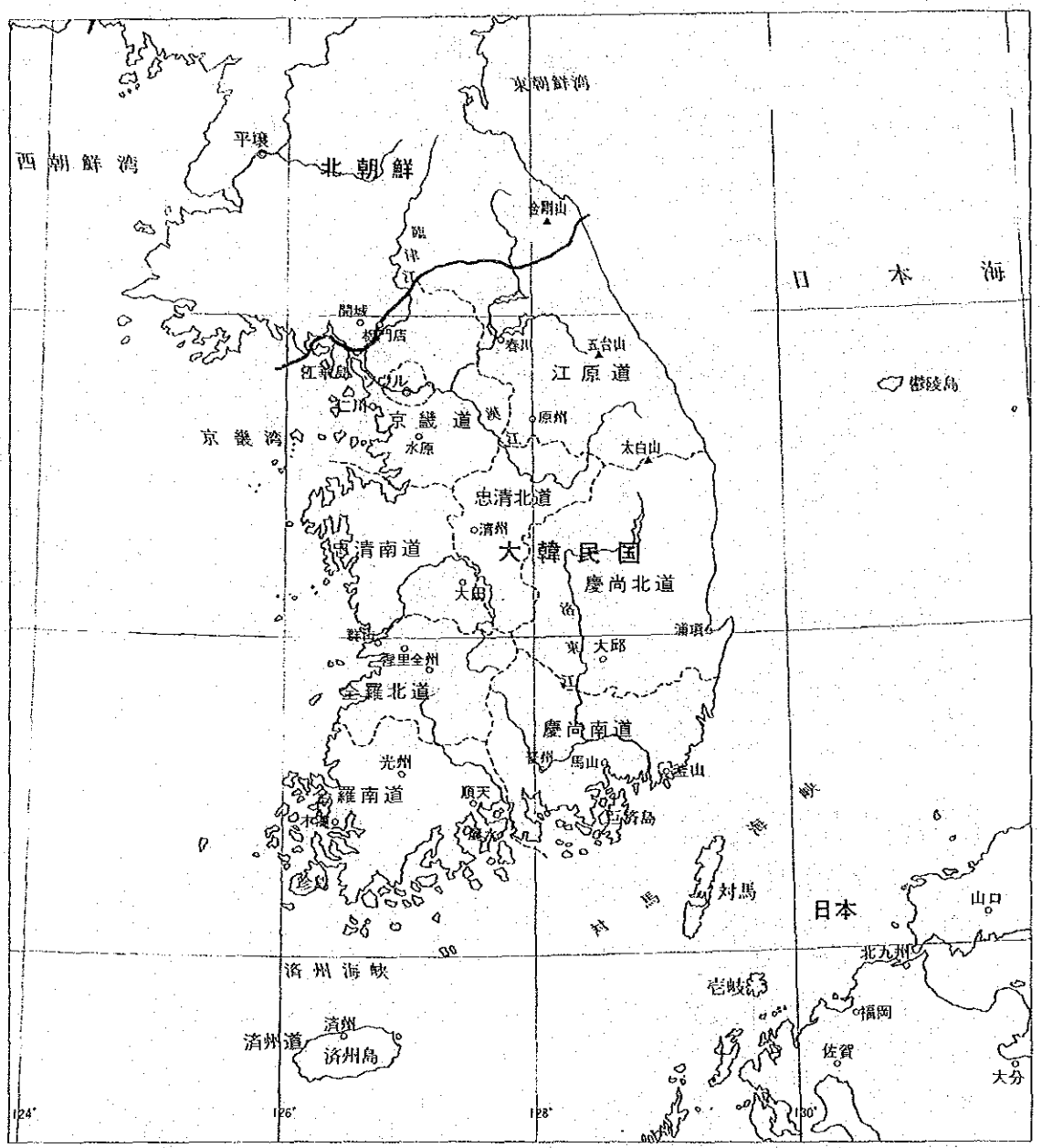
4．国内実施日程 …… 33

5．韓国青年名簿 …… 37

6．韓国青年招へい実績一覧 …… 46

7．昭和63年度青年招へい事業受け入れ実績一覧 …… 47

8．青年招へい事業実施協力団体連絡先 …… 48


西朝鮮湾
平壌
北朝鮮
東朝鮮湾
白頭山
鴨
緑
江
日本海
開城
板門店
春川
五台山
江原道
江華島
仁川
京畿道
漢
江
原州
京畿湾
水原
太白山
忠清北道
清州
清南道
大韓民国
慶尚北道
大田
洛
東
江
浦項
大邱
全州
全羅北道
慶尚南道
光州
晋州
馬山
釜山
羅南道
順天
木浦
麗水
巨済島
珍島
対馬海峡
対馬
日本
山口
北九州
壱岐
福岡
佐賀
大分
済州海峡
済州道
済州
済州島
鬱陵島
124°
126°
128°
130°

1．韓国青年招へい事業

(1) 事業の概要

1） 事業の目的

21世紀に向けて、日本と韓国との友好と協力の関係をより強固かつ実りあるものとするため、未来の国造りを担う韓国の青年を我国に招へいし、日本の同世代の青年との交流を通じ、相互理解を深め、真の友情と信頼を培うことを目的とする。

2） 実施方法

①招へい人数

昭和63年度は、100名の青年を同時期に受け入れる。

②招へい対象者

下記分野における指導的立場にある18～35歳前後の青年。

（各グループのリーダー、サブリーダーは除く）

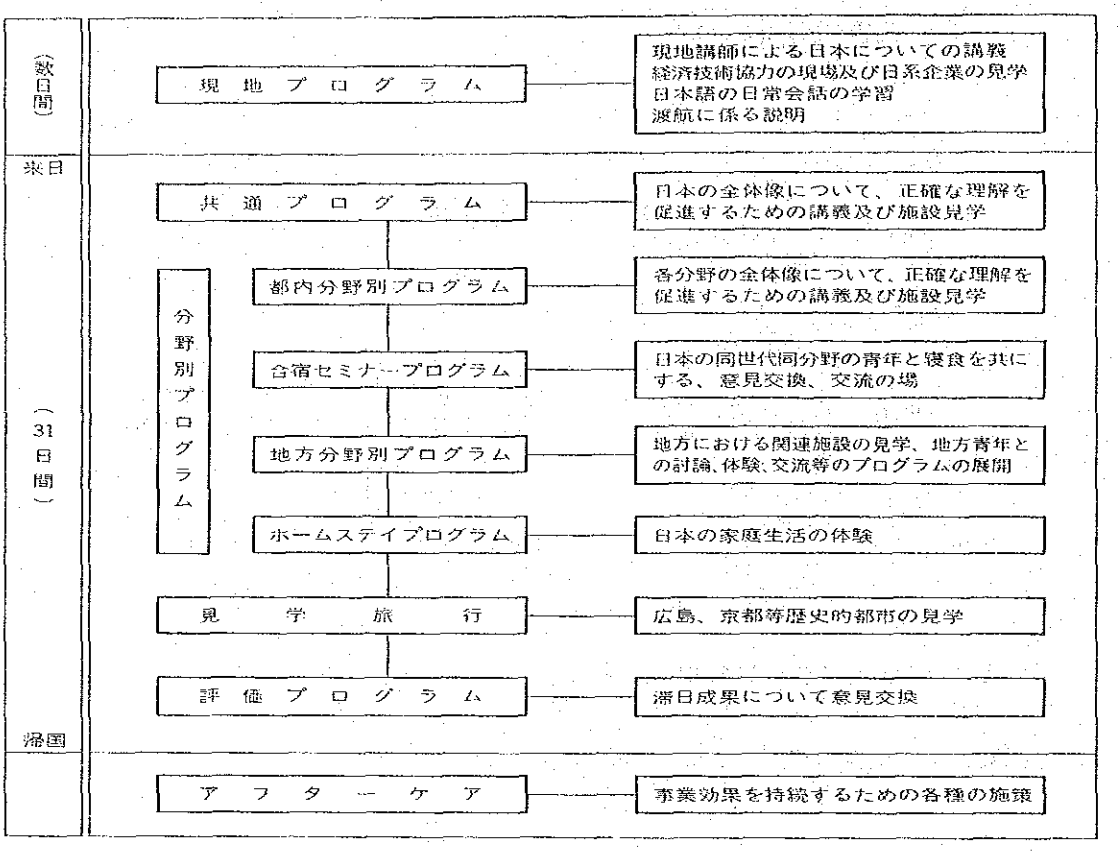
招へい対象者	人数
(i)小学校教師	25名
(ii)中学校教師（社会科、特に歴史、地理、倫理社会）	25名
(iii)高等学校教師（社会科、特に歴史、地理、倫理社会）	25名
(iv)学生（文科系）	25名

③招へい期間及び時期

招へい期間は7月10日～8月9日までの1ヵ月とし、出発前、数日間の現地プログラムを実施する。

2

3） プログラム概要



4） 受け入れ体制

本計画を円滑に実施するため次の２委員会を設置する。

①関係省庁調整連絡会議

(i) 任務：本計画の実施及び運営に係わる基本的事項につき協議。

(ii) 構成メンバー：

外務省経済協力局技術協力課
　　アジア局地域政策課
　　大臣官房文化交流部文化第二課
総務庁青少年対策本部
文部省学術国際局国際企画課教育文化交流室
農林水産省経済局国際部国際協力課
労働省労政局勤労者福祉部勤労青少年室
自治省大臣官房企画室
国際協力事業団

②実行連絡調整委員会

(i) 任務：実行計画の運営、分野別プログラムの実施及び各プログラム間の連携につき協議し、プログラム実施上の問題につき、国際協力事業団に対し助言。

(ii) 構成メンバー：関係省庁より推薦された民間の実施協力団体。

(社)青少年育成国民会議
(財)中央青少年団体連絡協議会
(財)世界青少年交流協会
(社)日本国際生活体験協会
(社)全国農村青少年教育振興会
(社)日本経済青年協議会
(社)勤労厚生協会
(財)ユースワーカー能力開発協会
(社)国際交流サービス協会
(社)青年海外協力協会
(財)国際協力サービス・センター

5） 実施運営分担

	プログラム監理	プログラム実施		食事・宿舎の手配
		連絡調整	実施	
現地プログラム	国際協力事業団	国際協力事業団	各国実施機関（在韓国日本国大使館）	各国実施機関（在韓国日本国大使館）
共通プログラム（都内）			国際協力サービス・センター	国際協力サービス・センター
都内分野別プログラム（都内）		実施協力団体	実施協力団体	実施協力団体
合宿セミナープログラム（東京近郊）				
地方分野別プログラム（ホームステイを含む）		実施協力団体 地方協力団体（国際協力事業団国内支部）	地方協力団体（国際協力事業団国内支部）	地方協力団体（国際協力事業団国内支部）
見学旅行（広島、京都等）		実施協力団体	実施協力団体	実施協力団体
評価プログラム（都内）		国際協力事業団	国際協力サービス・センター	国際協力サービス・センター

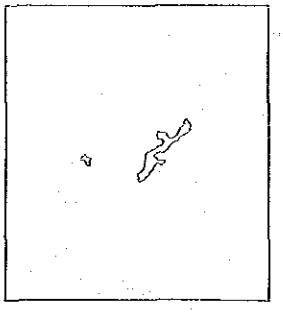
(注) 地方分野別プログラムは、地方公共団体の指導と協力を得て実施する。

(2) 実施協力団体と実施県

分野名	人数	実施協力団体	実施県
教員A（小学校教師）	25	中央青少年団体連絡協議会	岩手
教員B（中学校教師）	25	青少年育成国民会議	和歌山
教員C（高等学校教師）	24	国際交流サービス協会	長崎
学生（文科系）	25	世界青少年交流協会	岐阜

※共通プログラムについては、国際協力サービス・センターが全グループに対して実施した。

韓国青年プログラム実施県図



2. 招へい青年の印象

日本訪問を終えて

金　鎮成
団長

私たちを日本に招へいしてくださり、私たち一行が日本の旅行で多くのことを見たり、聞いたりできるように細心のご配慮をしていただき、さらに今日の盛大な歓送会まで催してくださった日本政府当局およびJICA、そして各協力団体の関係者の皆様、特にこの場にご参席くださいました皆様に深く感謝申し上げます。

私たち訪問団一行は、本計画を推進してくださった方々の温かい真心のこもったご配慮で、学校を訪問し、日本の教育制度について多くのことを学び、同じ教師や大学生との間では、合宿を通して、熱い友情を分かち合い、お別れのときには、名残惜しくて目頭を濡らし、また会おうと約束しました。

そしてまた、多くの機関を訪問し、すべての方がたから心のこもった歓迎を受け、言葉と文化の障害を乗り越え、真の友情の中で相互理解の幅を広げました。

一方、貴国訪問中に皆様からは美しくない過去の歴史について心を痛めているということを聞きましたが、これはありがたいあいさつではありますが、私たちのほんとうの心の痛みのすべては、わかっていただけないのではないかと思います。

私たち一行が日本国を訪問したのは、「韓国青年招へい事業」によるものであり、本計画がほんとうの意味の日韓両国の新しい歴史を創造する契機になることを期待しております。

また、ホームステイでは言葉と生活習慣の違いを越え、真心のこもった温かい愛の中で触れた日本の生活と慣習、そして文化を学び、隣人ではなく、一家族のような熱い情を分かち合うたびに、一層近い情を感じ、別れるときにはあまりにも名残惜しくて、その場で両国の国旗を作り、振ったりしました。歌をうたい、踊りもおどり、別れを惜しんで、両国の離別の歌とアリランを声高く繰り返し歌ったりしました。老若男女を問わず抱き合い、国家の別なくお互いを招待し、訪問し合おうと涙の約束もしました。

この時間が過ぎるとお別れしなければならないと思うと、情が厚い私たち一行は言葉では言い表すことのできない名残惜しさを感じます。

しかし、私たちが分かち合えなかった友情を私たちの子供たちが分かち合っていき、私たちの子孫が子子孫孫、この熱い気持ちを分かち合うことができればと願っています。

そして、40日後にはわが国で、オリンピック史上最大規模のソウル・オリンピックが開催されますが、お隣の国としてこのオリンピックの成功のため、多くの協力をお願いいたします。

日本国を訪問し、こんなに意味深く、有益な友情の旅ができるよう、お世話してくださったJICAと、すべての協力団体関係者の皆様、そして1ヵ月間私たちのために行動をともにし、献身的にお世話してくださったコーディネーターの皆様にも厚く感謝いたします。大韓民国の全地域から集まった私たち一行は故国に帰り、皆様のありがたい気持ちと、こちらで見て感じて学んだことを愛する生徒にはいうまでもなく、同僚、さらに全国民に伝え、「韓国青年招へい事業」が、所期の成果を

あげられるように最善を尽くすつもりです。

最後に今日の歓送会を準備してくださった皆様に、もう一度感謝の言葉を申し上げ、皆様と皆様のご家庭に健康と幸運が満ちあふれることをお祈りいたします。

さようなら、ありがとうございました。

（歓送会のあいさつより）

友情計画に参加して

金　寛植
教員A（小学校教師）グループ

7月10日から8月9日までの1ヵ月間の日本訪問を通して、日本について知らなかったことを、ほんとうにたくさん知りました。たとえ「群盲象を撫ず」のごとく、1ヵ月間、私が見て、感じたことが日本の一部分にすぎず、つまらないことであっても、私にとっては非常に意味深い1ヵ月でした。

共通プログラムを通じて、日本の政治・経済・社会・教育・文化・歴史など概括的にはすぎないが、知ることができ、各地方の官庁ならびに教育機関などの訪問を通して、日本の実情を確然と知ることができました。

特に日本の学校を訪問して、先生方の授業を直接参観し、また、日本の先生たちといろいろな場で忌憚なく対話をする中で、日本の教育の現況と問題点について深く理解することができ、非常にうれしく思いました。

今日の日本が豊かに暮らせる原動力は、まさに教育の力にあり、21世紀の未来社会の日本の発展も、教育の力にあるという事実を、日本国民すべてが共同で認識し、期待しているように思いました。それは子供たちの登下校を助ける父母たちの姿や、いつも研究し、誠実で勤勉な姿勢で子供たちの教育のために、全力投球される先生たちの目の光の中に感じられ、先端科学施設を備えている教育センター、および各地方ごとにつくられた数多くの博物館、図書館、スポーツセンターなど各種社会教育施設を見ることで、また教育行政を担当される方たちのお話を通して、知ることができました。

21世紀の日本の明るい未来を教育現場で直接見ながら、教師としての自分自身を振り返ってみることができ、視野が広がり、日本について理解できたという点で、今回の訪問は非常に意味がありました。

このような機会を設けてくださり、温かく親切に迎えてくださった日本青年団、JICAなど多くの方々に感謝の気持ちを伝えたい。

1ヵ月間、日本のあちこちをまわりながら見たり聞いたりした中で、一番印象深かった所は、九十九里と遠野市の訪問であり、遠野市でのホームステイでした。日本語がわからなくて、知りたい多くのことを見逃がしたが、ここで日本の人たちとの生活と風習、そして特性などを深く感じることができ、多くの方と友だちになることができました。

各種社会教育施設を通じて、郷土の伝統を引き継いでいく姿と、昔のことを保持しようとする姿に、日本人たちの伝統文化の継承と発展に対する愛着をうかがい知ることができ、どこで、だれと会っても、一様に明るい表情、優しい言葉づかい、礼儀正しく親切な人たちの姿に日本人の長所を学びました。

また、もっと豊かな生活を培うために、勤勉に働き、価値のあることをみずから進んで求めて、奉仕し、余暇を善用する日本青年たちの姿に多くのことを学びました。

温かい人情で家族のように接してくださった私のホームステイ家族の佐々木幹夫様と、吉里吉里海岸でキャンプをしてくださった盛岡と遠野青年団員の皆様に、友情の気持ちをお伝えしたい。ほ

んとうにありがとうございます。

日本、私たちの隣人

丁　守正
教員A（小学校教師）グループ

「韓国青年招へい事業」プログラムを準備してくださいました日本の関係機関に感謝いたします。

そして、日本滞在の1ヵ月間ずっと私たち一行をお世話くださいました佛木さん、浜岡さん、板坂さん、および岩手県青年団体協議会関係者と県青関係者の方々にも、御礼申し上げます。特に鷹觜事務局長、佐々木国際交流機構岩手県支部副会長にも感謝いたします。ホームステイ受け入れ家族の皆様へは、たぶん個別に連絡することと思います。ともかく、私たち一行を温かくもてなしてくださり、ほんとうにありがとうございました。

韓国と日本は近くの国として生活の様子とか、言語、人の顔つきもよく似ています。

教育現状、経済構造、産業、文化も似通っています。ただ、国民の意識構造と地政学的な位置が異なるだけです。今回の訪問で日本国民の勤勉さと親切など、よく守られている文化をたくさん見ました。

たぶん、私たち一行に会われた日本の方たちも韓国を少しではあるけれど、おわかりいただけたと信じます。

今、韓国は日本とともに、豊かな国になろうと多くの努力をしています。21世紀の世界は東北アジアの時代になるだろうと信じています。それは東北アジアに韓国と日本があるからです。ことわざに「遠くの親戚より近くの他人」という言葉があります。国交が正常化して20年がたった今の両国は、歴史的な話だけでもって考えてはいけません。

民間次元から両国に共に歩む人々が多く出てくることを願っています。帰国後、日本の経済、社会、文化、歴史、教育等、見て聞いたそのままを話すつもりです。隣人を助けることを知り、協力することが人間の集まりです。

自国の利益だけのために努力する国家は国際社会においては歓迎されません。

未来の世界は1日生活圏になるでしょう。12年ぶりに東西が一緒に行う今回のソウル・オリンピックが成功裡に始まるでしょう。世界は平和共存を唱えるようになり、地球村は幸福になることでしょう。両国の友好が、一層はぐくまれることを祈りながらペンを置くことにいたします。ありがとうございます。

ホームステイについて

景　恵永
教員B（中学校教師）グループ

約半月間の東京での公式日程と共通プログラムなどを終え、今や地方プログラムに旅立つことになった。価値観の差、生活習慣の相異、未熟な日本語会話力など、問題点は多くあったが、ここも人の住む所（？）だと思い、あまりおそれはなかったものの、やはり大きな障害は言語であった。しかし、目的地である南部川村が、徐々に姿を現しはじめると、かえって心は落ち着きだした。われわれ一行の乗ったバスの中は、これからまさに、日本人に会うという思いで、小さな動揺が瞬間的におこった。

村長の歓迎の言葉、海友会会長の歓迎の言葉などが続いた。その中でも一番のハイライトは、ホームステイのホストファミリーとの出会いの瞬間であった。これまで共同生活になれていたわれわれであったため、見知らぬ異国に来たという感じはしなかったのに、今や離れ離れになり、ホスト

について、おのおのの家庭に行くと思うと、この時になってようやく日本へ来たという実感がした。

わずか2泊してくるというプログラムではあったが、別れる同僚たちが、これほどまでに名残惜しく思われることはなかった。実際にホームステイから帰って来た日は、それまで親しくなかった同僚までもが恋しい対象になり、ホームステイは異国人との友情の架け橋の役割だけでなく、異国での同民族同士の連帯感を、より広く形成するきっかけになったようだ。

「おやすみなさい」。最初のホームステイで、2日目の朝早く、ふだんの習慣どおり朝の散歩に出かけた。畑で仕事をしているおばあさんに朝のあいさつをしたのが、この「おやすみなさい」だった。当然、お返しのあいさつをしてくれると思ったのに、不思議そうな表情で1度見つめ、再び仕事をするおばあさんを見て、無礼だと思ったその時、頭に浮かんだ単語が「おはようございます」だった。

またもう1つの例。「学校見学にいらっしゃいますか」というホストの丁寧な問いに、それが何の意味であるのかわからず、何か言われると無条件に、「はい、そうです」という習慣のため、結局、自分が望まないのに学校見学をしてきたというある先生。そしてホストとのショッピングの時、品物を落とす失敗をして、「すみません」の代わりに「ありがとうございます」と言って、周りの爆笑をかった例。

言語のもつ魔力は、どこにおいても非常に強いという事実が立証される瞬間であり、日本人との対話はもちろん、日本の社会、教育文化、歴史など、諸般の知識を自分なりに消化しようとすると、基本的な日本語会話能力を備えていなければならないと思う。

われわれはよく、このような表現をする。「生者必滅　会者定離」。日常よく使われている短い単語の中に、仏教信者でなくとも人生の意味が凝縮されているのを感じる。文化、生活、習慣、考え方が異なる地域の人々との出会いというものは、短期間にその文化圏の人をすべて評価するのには、むずかしい面があるが、言語の障害を直接体験し、乗り越え、生活様式の違いが失敗として現れるとき、これ以上の友好促進の方法はないように思われる。そのような点で、〝日本〟という社会を知るための〝出会いと理解〟の場として、最も誠実で飾り気のない素直さを感じたのは、ホームステイではなかっただろうか。

個人と個人の出会いが、国家と国家間の友好の次元に発展されるであろうと確信しつつ、このようなプログラムを準備遂行してくださったJICA、青少年育成国民会議の皆様に感謝の気持ちを捧げます。

日本の教育を見て

姜　榮錫
教員B（中学校教師）グループ

1　教育の意義

むくげ・さくら・鳳仙花など、すべての花はそれぞれの美しさを持って咲いているように、人間も、運動に素質がある人、音楽に素質がある人、科学に素質がある人と、多様な能力をそれぞれ持っている。教育はこのような人間の能力を、そのままうまく伸ばし、美しい花を咲かせることができるようにすることだ。

伝統社会において、教育は主に家庭が担当し、近代社会以後、大衆教育の必要性により、教育はほとんど全面的に学校が担当してきたが、今日は学校と家庭が互いに有機的な関連を結び、相互に機能していると見ることができる。

2　日本の教育

（1）　学校教育

韓国の学校教育は2学期制度で、年間授業日数

は220日以上である。これに比べ、日本は3学期制度で、年間授業日数は240日以上である。週あたり授業時間は韓国34～36時間に対し、日本は30時間であり、外形的には、ほとんど同じような授業時間数に見える。

しかし、韓国は正規の授業のあと、自習および補充授業が続き、学校教育の比重が高いが、日本は学校の授業が終わったあとの校外教育(例：塾)にかなりの比重が置かれているようにみえる。

また、韓国は平準化政策により、学校間の学力差が少ないのに比べ、日本は学校間の学力差がひどく、一流校を好んで選ぶ傾向がある。

そして、韓国は学生たちに国民精神教育を非常に強調し、授業の時間だけでなく、掲示教育に占めるその比重が非常に高い。一方、日本の教室の掲示物を見ると、ほとんどが生徒個人の紹介、清掃内容、グループの役割や目標などで構成されていることから、国民精神教育に対する意識的な教育の代わりに、生徒個人の個性を伸ばすことにより重点を置いていると思われる。

(2) 社会教育

全国至る所に設置されている各種スポーツ施設、青年の家、自然の家でなされる水泳、キャンプ活動などの各種教育を通して、青少年たちの健康で明るい生活が行われている。また、青少年育成国民会議により実施されている通信教育、団体活動の推進教育、青少年非行防止活動、外国青少年との親善交流などを通して、青少年が健全に成長し、国際的視野を広げている姿が見られた。

日本の社会教育は韓国より幅広く、生活により密着した教育が自然になされているようだ。

(3) 塾

生徒たちの多くが学校の授業を終えたあと、夕方学習塾に通うというように、教育において塾の占める比重が非常に高いという現実に照らし合わせて考えてみるとき、日本の子供は勉強の面では世界で最も忙しい生活を送っているのではないかと思われるほどだ。こうした学習塾の存在は、日本人の学力信仰が非常に高いということを端的に見せつけている。韓国では、学外禁止措置により、学習塾の存在を原則的に認めないため、塾の存在は日本に比べて相対的に比重が低いが、学校教育が延長されるため、学力信仰は韓国の状況でもあてはまると見られる。

学校は多人数学級であるので、教師の学習指導に多くの困難がある。そのため、学校教育の場で示される学生たちの学習意欲を十分に満たすことができず、塾が発生する。そこでは、ほとんど個別学習に近い形で学習指導がなされているため、学生たちの学力の伸びにたいへん寄与しているが、知識獲得だけが教育の中心になるため、知・情・意が完全に調和した人格教育という面で多くの問題点が付随すると見られる。

3 まとめ

教育は学校教育と社会教育が互いに有機的な関連をもって、相互補完的に行われるとき、知・徳・体の調和のとれた人間を育てていくことに寄与できる。しかし、今日の学歴・学閥社会においては、知識獲得だけが最高であるという観点が支配的であるため、社会教育を軽視する傾向がある。そこで調和のとれた人間を育てられず、頭でっかちの奇形的な人間が育てられやすい。したがって、教育改革審議会において、学力偏重の弊害をなくす提案がなされることが望ましいと思われる。

日本の社会構造

安 瑄禮
教員B（中学校教師）グループ

日本に来てひと月余り過ごして、うわべの部分、それもごく一部分を見ただけなのに、日本について書こうという行為そのものがひどい過ちではないだろうか、という怖れにおそわれる。

明治維新を契機とし、近代化の第１歩を踏み出し、国民たちの強い意志と優れた創造力、そして国家の体制が三位一体となり、近代化に拍車がかかった。また、発達した農業、封建領主たちが行った工業化の施策、協調心、教育熱の高さが確固とした基礎となって、日本は世界を目指し、野心を持ちだした。そして戦争を始めたが、結果は敗戦であった。敗戦後、非常に短い期間に現在の富を築き上げたことに対し、驚きとともに危機感を感じる。

このような富を増やすに至るまでの根本原因は何であろうか。帝国主義の時代を引っ張ってきた強い精神力、教育熱心さ、よく整った政治制度にアメリカの基幹産業を中心とした敗戦後の援助、そして朝鮮動乱（1948年の６･25動乱）、ベトナム戦争……。このようないろいろなことが好条件となり、世界中の人々が驚くほどの巨大な成長を成し遂げたのではないかという気がした。

日本に来て、学校訪問、ホームステイそして教師たちとの対話を通して感じたのは、徹底した責任意識を持っているという点と、世界の中での日本を具現しようとする考え。うまく現実に適応する適切な状況把握力を持った人々が多数存在するので、自然な制度の中でバラバラにならず、１つの求心点に向かいまい進してきたのであろう。そして、日本の産業が急速に発展する契機となったのは、戦争後、アメリカ軍によりなされた民主改革であり、この民主改革を土台にしつつ、日本的な企業経営により労使紛争の少ない安定した雰囲気の中でみんなが働いた結果、企業は急速に成長した。このような企業の成長が日本の経済力を飛躍的に高める効果をあげたのであろうと思う。

また一方心配になるのは、日本の教育制度において、少数のエリートを中心とする優待政策をとった結果、多数の人々が教育戦争において疎外感を感じ、初めから学業から目をそむけてしまう状況に至っているらしいことである。

このように個人差が顕著に露呈した場合、個人と個人の間に異和感が生まれ、学校生活への適応力が欠けている学生に集中的にしわよせがいき、そのつらさゆえに、いじめ問題が引き起こされ、人間軽視の風潮が徐々に現れ、そしてこのような状況が学校においてのみでなく、社会にまで広がり、職場においても問題になるであろう、と私なりの推測もしてみた。

現在、日本は経済大国として世界から認識され、電子産業が頭角を現してきており、今や富の蓄積から離れ、世界のため、富の分配のために努力を傾けてくれればと望む。今の時代は、開発途上国と形式ではなく誠実な真心で貿易を行い、世界の人々がおしなべてよりよい生活ができるようにと、広い心で視野を広げていく段階であると考える。

日本人、その親切の源

鄭　榮一
教員C（高等学校教師）グループ

私にとって日本は遠い存在であった。外国に対して私が持っている知識など、とるに足りないものではあるが、数ある国家の中でも特に日本は、距離を感じる国であった。

日本の国旗が描かれているJAL機に乗り、日本に向かいながらも私は複雑な気持ちを隠すことができなかった。少なくとも私にとって日本とは、過去の韓国との関係において、「もらう物はもらうが、与えることはない」という態度の国であった。

東京の夜の街は華やかであった。ホテルの窓ごしに東京の夜景を眺めながら、私は悲しい思いにとらわれた。イーボンチャン義士の不屈の闘魂が立ちこめるこの地で、「星を数える心で、すべての死に行くものを愛」そうとした尹東柱が疑問の獄死を遂げたこの地で、友情の架け橋を渡すということがどんなにむずかしいことであろうかという

思いがした。

しかし私のこのような認識の変化は、思いもよらないところから始まった。

それは日本人の親切であった。東京でのある日、同僚の金先生と私は外出した。しかし地下鉄の路線がよくわからないわれわれは、迷うばかりであった。その時近くにいた日本人に行き先を下手な日本語で尋ねたが、思いがけず彼は改札口だけでなく中まで入ってきて乗る所を教えてくれたのだった。そして足早に去って行くその日本人のうしろ姿を眺めながら、私はほんとうに深い感銘を受けた。

私が出会った何人かの日本人、彼らは日本の中の平凡な日本人であり、韓国に対して友好的だったと思う。彼らのおかげで私は、日本人を嫌ってばかりいるわけにはいかないと、だんだん考えが変わっていった。

私は日本人の親切さに好感を持つ。韓国人と日本人、人間が持っている根源的な姿はけっして変わることはないだろう。

私は考える。今後日本人に対するわれわれの認識が変わるためには、日本人と日本政府の絶え間ない努力が必要であると思う。

韓国に、「言葉一つで千両の借りを返す」ということわざがあるが、われわれは日本が「ほんとうの親切で千両の借りを返す」ことを心より願っている。

私はこの訪問を契機として日本に対する関心をより高めたと言えよう。そして日本を見続けるだろう。何人かの日本人がしてくれた親切で私が新しく日本を認識したように、日本はほんとうの親切さをもって私の祖国韓国とともに、歴史的葛藤を理解し解消していくのに努力しなくてはならないと思う。このような努力こそ、21世紀の真の友情を標榜する日本人の精神にもかなうものだと信じて疑わない。

日本における１ヵ月

金　善權
教員C（高等学校教師）グループ

７月10日JL952便がソウル上空を通過してからわずか２時間後、われわれ一行は直接日本を体験することになった。

成田空港に降り立ったときは、とても湿気が多く、雨がしとしと降っていた。われわれ一行はJICAの案内で池袋のホテル・メトロポリタンに着き、旅の荷をほどいた。胸が高まる中、日本での１ヵ月が始まった。

７月12日から24日までは日本の社会と教育等について理解する機会が与えられた。特に日本における女性の社会進出と権威向上および平等関係への副産物としては、それが国家発展に役に立ち法律的・哲学的意味が十分にある反面、家庭での母として妻としての役割をもう１度深く考えなくてはいけない、という慎重な態度が表れ始めてきた。これは核家族の経済的地位を向上するという利点がある反面、子供たちの疎外意識が強まり、それが教育問題とも直結していて、〝子供たちの父母に対する態度〟〝学生の教師に対する態度〟および〝学生たち間の態度〟に大きな影響を与えていると思われる。

日本は教育の量的膨張とともに、質的向上、特に倫理意識の回復を急がねばならず、親子間・師弟間の精神的支えを見つけるという宿題を抱えていると言えよう。

昭和の産業経済を再生させた戦後の努力は、私の個人的な考えとしては、韓国がすぐに学ばなくてはならないことだと思う。

日本の多くの教授や教師の方がたは、日本の過去と現実に対して正直な見識を持っていた。日本人の意識構造を分析したものの中で、近代以後現代の日本人は「福沢諭吉」の自由・平等・社会観・

国際認識等の思想の影響を多く受けているとされているが、たいへん共感を覚えた。日本人教授がその意識構造に対する短所と改善点について話されたテーマにおいて、その良心的な見解に深く感銘を受けた。

われわれが見た学校の施設はとても素晴らしく、教師や学生は自由な雰囲気の中で活動していた。墨東養護学校の校長先生の人間尊重教育観には、頭が下がる思いであった。

日韓教師間の交流は、お互いの教育現況と社会を理解するのにたいへん役に立った。

7月25日以後のプログラムを通じて、地方の文化と産業および教育の特色をより深く知ることができた。徹底した地方自治制が実施されており、教育問題においてはいくつかの点を除き、韓国と似たところが多かった。長崎原爆資料館では、日本人がどれほど戦争を嫌悪し平和を追求しているか、歴史的悲劇を忘れずそれを教訓にしようとしているのかがよくわかった。

対馬でのホームステイは一生忘れられない思い出として残るだろう。対馬のいたる所で感じられた韓国的匂いは、〝故郷の香り〟そのものであった。対馬の兄（と言える間柄となった）とその奥さんの心からの愛情と気さくな人柄、誠実さ、また、気配りの行き届いた案内に深い敬意を表するとともに、この縁をさらに深めていきたいと思う。

京都・奈良・倉敷は日本文化の宝庫であり、日本を守るかがり火のようであった。

日本人は親切で秩序を尊重する民族である。急がずすべての人が自我の実現に努力する。日本は韓国に比べ、自然と神の祝福をより多く受けて生まれた国である。多様な自然環境とそれをはぐくむことができる人々を神から授かった。日本は今、輝く子供の瞳があり、自分の仕事に没頭し生きがいを求める大人がいる。

色とりどりの花火や食べ物や機械や商業が、生き生きと存在している。原宿に若者がいるかと思えば、東京大学の研究室で汗を流す者もいる。伝統と現代がおのおの独立しながら、または、混じり合ったまま存在する一方、国家政策があり自負心の強い地方人の生活がある。強要や度の過ぎた干渉はない。ほんとうの教育・文化・政治・経済・芸術……すべてが多様である。性と他国文化に対しても非常に開放的だ。多様性と開放性の中で、何が一番日本的なのか？　〝日本化するということ〟それが日本的だ。〝日本中心的に解釈をすること〟が日本的だ。日本的思考を身につけ、国際社会の中でどんな価値観を持って現代にうまく適応していくのかを教える。これが日本人の矜持であり自負心のようである。

しかし道に迷った羊のように、役割を求めてさ迷っているように思える。精神的な支えがなくなりつつある。多様性のたいへんな力が相対的な優越性を占めている反面、結束力は相殺されつつある。日本は今陣痛期にある。新しい位置、新しいリーダーシップを求めて努力しなければならず、長期間の信頼が得られる精神的な交流を求めなければならない。それは学校教育の回復により可能である。

東京の夜は輝きわたっている。寝入ってしまえば明るい日ざしの中で目が覚めるであろう。たくさんの思い出を残してくれた日本のすべての風物と、私たちのために尽くしてくださった多くの方々に、心より感謝いたします。

1988年8月7日

共に生きていく社会

梁　忠孝
教員C（高等学校教師）グループ

先の7月10日日本に到着し、4週間で東京、箱根、長崎、対馬それから京都をまわり、多くの日本青年たちと話をすることができた。対

馬においては2泊3日のホームステイをし、深い情を分かち合い、家庭の内部までよく見ることができ、日本の文化を深く感じることもできた。その中でも特に心に深く残った印象的なことは、長崎の原爆資料館と茶道体験であり、友情を深めることができた合宿セミナーおよびホームステイであった。

7月26日午後に、平和のホール、原爆資料館、平和公園を見てまわった。平和のホールで見たアニメ映画〝原爆投下の日〟を見ながら、私は人間とは果たして何なのか？　ともう1度考えざるをえなかった。このような恐るべき威力が存在する限り、人類が造ってきた歴史、文化、技術、愛、平和等すべてのものが無にすぎないと思われた。アーノルド・J・トインビーが「人類が永遠に生存すると仮定しない限り、人間がなしえるすべての物は無意味に帰す」という言葉を痛感した。

7月27日、長崎市のある伝統的な日本家屋において茶道を実際に体験することができた。私たちが入った入口には、水がまかれてあった。まず心を清め、器をふいたあと、心を込めてお茶をたて、感謝の念をいっぱいに表しながら飲む中で、客人に対する礼儀、上下区別のない姿勢、最善を尽くして瞬間、瞬間を迎える精神を感じとった。よく人生の逆転ドラマを、野球の9回裏ツーアウトからの逆転にたとえられることがある。たぶん、このような逆転がおこり得るのは、最後の瞬間に最善を尽くした結果であろう。茶道の精神は、そのような最善を尽くすという心を、生活する瞬間瞬間にあてはめるということだろう。客人に応対しながら、器をながめながら、庭を鑑賞しながら、せみの声に耳を傾けながらも、「機会は今回だけだ」という心で接しているのだと思う。

なんといっても、同じ人間であることを確信し、共に生きており、共通した考えを持っていると感じながら、お互いの友情が深まったのは、相模湖のトリムセンターでの合宿セミナーと、対馬でのホームステイであった。それは表面的なつき合いでなく、お互いの呼吸を感じながら、体と体のふれあいの中で汗を流し、夜遅くまで話し合い、歌と踊りを通じ同じ人間の共同体であるという意識を持つことができたためである。固い信頼と誠実さが基本になれば、お互いがより多くの犠牲をいとわなくなるであろうし、それが人類の文化をより高い境地に引き上げることになるであろうと確信した。

最後に、今回「韓国青年招へい事業」に参加し、私自身、より謙虚にならねばと反省させられた。ありのままを偏見なく見つめ、相対主義的な立場で認識するという態度が不可欠であった。そして、より大事なことは、われわれすべての教育者たち(筆者註：韓国と日本のすべての教育者)は、過去を事実のまま率直に認めて教え、と同時によりよい未来のためにはどうしなければならないかということを共に考えなくてはならないし、だれの胸にも痛みを与えてはいけない、という人類愛の精神をしっかり植えつけなくてはならないと確信した。

朝の日ざしをあびて

李　東仙
学生グループ

長く続いた梅雨も開け、強烈に感じられる朝日が降り注いでいるあの遠くの小さな建物の屋根を眺めながら、とても懐かしい人々のことを考えてみる。

正直に言って、金浦空港を出発して雲の上を飛びながら、日本の玄関である成田空港に到着してからも、何も考えていなかった。ただぼんやりしていた。何か事が起こったときには、そこにぶつかって克服していくだけだという思いであった。海外旅行によくありがちな心配とか、胸のときめ

きとかいうものは最初からなかった。そばで騒いでいる人々の中にあって、あまりにも冷静な私自身の姿を発見することができた。

到着した日、短いオリエンテーションで始まったわれわれの日程は、多様に準備されたプログラムによって計画性をもって進行されたが、知らないでいた事実をいっぺんにまとめて認識しようと努力したり、また、認識させられたりで、へとへとに疲れ果ててしまっていた。

1日1日の始まりが、眠たい目を無理やり開くことから始まったような気がする。しかしながら、すべての日々に張り合いがあり、私の人生にあって、2度と繰り返されることのない永遠で美しい追憶になりつつあった。その時々に感じることのできなかったことは、重い足をひきずりベッドに入ったとき、そして窓辺で砕ける朝日をいっぱいに受けたとき、その瞬間、瞬間に感じることのできる日々だった。

人々は、過ぎてしまったことに対しては、すべて美しかったと言う。不慣れな土地、見知らぬ人々と過ごした最後の日にこの文章を書きながら、1ヵ月間の日々が走馬灯のように目の前に浮かぶ。

その中でも、特に永く記憶しておきたいことは、同年配の日本の青年たちと過ごした合宿セミナーである。よく手入れの行き届いた庭木のように、洗練された穏やかな彼らの親切と礼儀正しい行動は、なめらかな岩の間をかき分けて流れる清らかな流れのように、私たちの胸に深く染みこみ、一筋の泉になり、私たちに清く純粋な世界をもたらした。いくら疲れていても、その疲れを顔に表すことなく、最後までほほ笑みに満ちていた彼らの姿には、ただただ感嘆するだけであった。

交流会が終わり、彼らが流した温かい涙で、旅行に疲れ、名残惜しさで切ない私たちの胸は涙にぬれ、残った日程に期待感を抱かせてくれた。

あと数時間後には、私たちは親しくなった友と別れ空港に向かう。その間、積み重ねた友情を21世紀のための礎にし、やがて来る未来に向かい、力強く乾杯の声を上げ、別れの寂しさをなぐさめるというのはどうだろうか。

日本紀行を終えて

洪　政杓
学生グループ

「始まりが事の半分」ということわざが韓国ではよく使われる。日本に着いた当初、果たして1ヵ月の滞在で、どれほど学び感じることができるであろうか、と疑問であった。しかし時間は間違いなく過ぎてしまい、今私は、何枚にもならない原稿用紙を前に感想文を書こうとしている。僭越ではあるが、完全に私見であるということを前提に、その間見て感じたとおり書こうと思う。

まず最初に〝縮み指向〟に関する私の見解は、某大学某教授の見解とは少し違うと言えるだろう。日本列島は南・北韓国を合わせた約3倍の広さということだが、人口を考えると、それほど広いわけではなく、諸空間は最大限に効率よく利用されているといえよう。建築物においても、無駄な空間はできる限り排除し、ほんとうに必要な部分に、必ずなくてはならない設備を完備し、ビルや住宅が建てられているということである。一般的には大きな物が素晴らしいとも言えるだろうが、たとえ小さくても大きいものに劣らず機能を発揮するならば、その美と機能の価値を認め、そこに誇りと矜持を持つ民族であると感じた。

そして次に時間概念について……新幹線ひかり号は平均時速200kmで走るというが、それは時間の節約が即、生活の便利さとゆとりに直結していると感じたが、それだけでなく、すべてにおいて緻密な時間利用のための予約とプログラム設定がされている点が、とても印象深かった。スピード時

代に生きる現代人とはこういうことであろうかと思う一方、余暇利用と余裕という面では、強い疑問を抱かざるをえなかった。とはいえ国家全体を公園化しようとする動きや、レジャー施設が高度な管理技術によって整備されている点などはうらやましい思いがした。

3番目に無秩序の中の秩序について……日本が今日の日本になり得た根本的な力は、果たしてどこにあるのだろうか、という疑問に答えるには力量不足を感じるが、私なりの考えを述べようと思う。それは祭りの文化の活性化を通じた連帯感、すなわち、共同体文化の形成により結集した民間の力が、非ゼロサムゲーム理論を指向する政治体制と結びつき、抜きん出た力となったためではないかと思う。息が詰まるほど混雑した東京の街でも、不思議なくらい秩序が保たれていると思うのは、私の過大評価であろうか。

とはいえ、日本人はやはり度の過ぎた個人主義的思考からくるエゴイズムにすでに冒されており、経済的に豊かな国に成長はしたが、相互主義的な関係は無視し、最近では儀礼的に開発途上国と接していると感じられた。また、自国の文化的優越性を強調することに努め、すべてのものを日本化させようとしていることに脅威を覚えざるを得なかった。

最後に大韓民国が統一され真の民主主義のための努力をするならば、わが国も世界大国に成り得るであろうに……という思いを抱きつつこの小文を終えることにしよう。

遠くの親戚より近くの他人

鄭　勝元
学生グループ

今の韓国ではあまり使われなくなってきた言葉ではあるが、「遠くの親戚より近くの他人」ということわざがある。これは近くの隣人の方が、遠くの親戚より親しいという意味である。それほど韓国では隣人を大事に思い、親密なきずなの中で生活してきたということである。しかし、ただ単に隣人というのは、住居空間が近接しているという意味にしかならない。

広い意味で考えるとき、日本は韓国の隣国である。しかしながら、隣人も親しくなり、心が通じ合えば親戚同様になるという言葉はあまり使われない。お互いが気まずいわだかまりを胸の隅に持っているためである。

1ヵ月間の日本での生活がほぼ終わりかけようとしている今に至っても、そのわだかまりが消えていない。われわれの中にあるわだかまりがあまりにも大きいせいであろうか。いや、日本人は過去をあまりにも簡単に忘れようとしているし、また、たやすく忘れてしまう習性があるというが、理由はまさにそのためであろう。われわれにとっては、けっして忘れられない受難の歴史であるにもかかわらず、日本人はなんの意味もなく受け止めているためである。

日本滞在の1ヵ月間に感じたことは、まさにそういう点である。日本の学生とは個人的にたくさんの対話の時間を持ち、交流を深めることができたが、その学生たちはごく少数の日本人であり、全体ではない。

しかし、彼らの中でも、韓国について正しく理解している人は少なかった。隣国であるにもかかわらずである。日本人が、楽天的であるということを感じたが、それはある一面においては逃避の意味も含んでいるためである。

根本的な問題は、日本の教育にあると思う。今回のプログラムのテーマが、「21世紀に向けての日韓の友好強化」であり、21世紀を担う若い世代間の交流を多く持つことが重要であると思うけれども、それよりは日本の教育制度、いや、教育の内容が改善されなければならないと思う。

隣国として、ほんとうの意味において心の通い合う隣人になるには、お互いをよく理解しなければならないのに、日本人たちは韓国という国について、果たしてどれくらい知っているだろうか。最高学府の大学生たちも、ソウル・オリンピック程度しか知らない人がかなりいた。もちろん韓国人も日本という国について正しく理解していない。しかし、相対的に日本人が韓国について知っていることよりも、韓国人はもっと多く日本のことを知っているといえる。偏見と先入観による考えと知識も多いが……。そのような点を韓国人も改めなければならないと思うし、日本人が持っている長所等をわれわれは見習わなければならないと思う。

韓国の学生たちは、大学で日本について多くのことを学ぶけれども、それに比べて、日本の大学生たちは、ほとんど韓国についての教育を受けていない。韓国と日本がただ単なる隣人ではなく、心の通い合ったほんとうの隣人になるためには、両国間の関係において誠意を見せるべきであり、韓国に対して多くのことを学生たちが受け入れなければならない。

日本での１ヵ月間の生活の中で、日本人の親切な態度や勤勉さなどに触れた。特に、日本の大学生たちと合宿セミナーを共にしたとき、彼らの誠意、親切、そして準備が周到になされていることを知った。そして、国籍を超えて若さを共有する世代間では、熱い情熱と希望に満ちた未来のために前進あるのみである。

言葉の障害もわれわれにとっては、無意味なことであった。お互いにとってよい機会になったであろうと信じる。そして、彼らが、私たちとの出会いの中から得た結果を、多くの人々に伝えることであろうと思う。そうすることにより、日本と韓国はお互いに理解することのできるほんとうの隣人になれるであろう。

終わりに、平和公園内に建立することができない韓国人慰霊碑*を広島で見たときの感想を、簡単につづろうと思う。

恨

はるかなるあの空のはてを凝視すると、
涙がとまらない、
二万の霊魂は、いまだ、九泉をさまよう。
くさりにしばられ、
その恨多き歳月は、
祖国山河への念願で１日を送る。
安らかに眠る場所ひとつもない異国の地で、
冷たい視線さえ受け、
苦痛と切なさは、
今、まさに悲しみに変わった。

彼らの居場所は、果たしてどこにあるのだろうか。

＊（註）韓国人原爆犠牲者慰霊碑について

昭和39年、広島県関係者や学識経験者により、広島市平和記念施設運営協議会が設置され、平和公園の管理、運営にあたることになった。これは、平和公園という聖地でもあり、観光施設でもあるという特殊性を持った施設の運営にあたるためであった。公園の敷地が限られている条件下で、公園内への記念碑や慰霊碑の設置がますます増えつつあったが、昭和42年になり、公園内への時計塔の建設に関する審議の際、今後公園内には記念碑や慰霊碑を設置しない方針が打ち出された。以後、この方針に基づき公園内には一切工作物は許可されていない。そのため、その後の記念碑や慰霊碑の設置は、公園の周囲の河川緑地に多くなっている。なお、昭和42年以降に公園内に建てられた記念碑や慰霊碑は、それ以前に許可申請が認められたものに限られている。

韓国人原爆犠牲者慰霊碑は、昭和45年４月10日に在日本大韓民国居留民団広島県本部により建設された。当初、公園内への設置を希望していたが、広島市平和記念施設運営協議会の決定により、公園内への建設が不可能となったため、朝鮮王朝最後の王世子李垠殿下の甥で、当時騎兵第五連隊に所属していた李鍝公殿下が被爆し発見された、相生橋に近い本川橋西詰めの河川緑地に建設された。

3. 合宿セミナー参加日本青年の声

貴重な体験を今後に生かしたい

青木　直芳
東京都・教員

今般、「韓国青年招へい事業」に参加させていただき、なにものにも換えがたい貴重な体験を得て今後の勉強面でも参考になることが多く、この体験をより有意義に活用しようと胸をはずませているところです。

さて、今回の機会に考えたことを述べさせていただきたく存じます。

1．交流プログラムで感じたこと

私の所属したグループでの討論は飾ることのない姿で日本の教育の実状、韓国の教育の実状を披露し合い、まじめすぎるくらいの話し合いでした。そのなかで気になったことは、韓国の先生方は、今でも日本の教育が昔の軍国主義的な時代の教育をしていると思っていたこと、年輩の先生方が、日本の現実を昔の目で見ていることにより、正しい日本の今日の姿を知らないことでした。このようななかで、今回の「韓国青年招へい事業」のような直接体験により、考え方が根こそぎ変わった先生も多かったろうと推察いたします。両国の交流の機会が今後ますます拡大していくことを切望するばかりで、若くて新鮮な年代の交流こそ両国の友好に必要不可欠なものと考えます。

次に、今回来日された先生方と日本の若者たちが単発的行事として交流を深めたと考えるのは正しくない考え方で、この機会を契機として、将来にわたって友情を深めていく継続的努力がなければならないと考えます。

2．全般的な面で感じたこと

①長幼の序の一面

私が相手にビールをつぐとき、相手に敬意を表して両手で注ごうとしたとき、やめてくれといわれました。受ける者が年下の場合、グラスを両手でささえて受けるのは当然なのですが、注ぐ私は年上なのだからあらたまって両手で注ぐのはけっして正しいのではなく、片手で注ぐのが一般的なやり方なのだというのです。韓国人と接するとき、かくのごとく現地の風習をしっかり知っておくことも大切で、これがスムーズに行動としてできるように異国理解にさらに努めねばならぬと感じました。

②他人の心の痛みがわかる（全団長先生のあいさつのなかから）

植民地時代に受けた民族の屈辱、肉親の苦悩は足を踏みつけた側はわからなくても、踏みつけられた者はどんなに傷ついたでありましょう。過去を正視し、民族の歴史を理解したうえで、新しい両国の友好関係を創造する意気が必要に思います。

彼らとの交流を終えた今、愛情を覚える韓国に再度訪問したい欲求がわき出るばかりですが、今は私の立場上それもかなわず、明年には韓国を訪問して、今回知り合った韓国の若い先生方と現地で再会して友情を深め合うことを今から楽しみにしております。

近くて近い国・韓国

中内　すま
大阪府・公務員

異文化にふれると新しい視点と新たな感動を生

む。そして、直接人と人がふれあうことによる感動はもっと大きい。

1．こんなに似ている

他の外国人と比べて韓国人ほど日本人と表情・しぐさ・服装の点で似ている人たちはないだろう。韓国で勉強をされたコーディネーターの森下さんは、名前から日本人だと判断したが、それほど韓国人の雰囲気を持っていた。日本に長く住んでいる権さんたち通訳の人たちは、それと逆に、日本人のような雰囲気を持っている。

通訳の人がいないとき、私たちは片言の英語、少しずつの日本語と韓国語で交流していたが、漢字を書きながらの会話も効率よかった。驚くほど、名詞も動詞も同じ漢字なのである。中国人と話したときも漢字は有効なコミュニケーションの手段だったが、中国語と比べるとだんぜん韓国語が日本語に近い。また語順も、文法も同じなのでわかりやすい。韓国の人が英語をマスターするより日本語をマスターするほうがよほど速く、日本人にとっても一番マスターしやすい外国語である。これは大きな発見だった。

2．ウリナラ・ウリマル

ミーティングやおしゃべりをしているとき、彼たちはしばしば「ウリナラ（わが国）」、「ウリマル（自国語）」という言葉を使った。われわれもそれに匹敵する言葉を使うが、「日本」「日本語」という言葉を使い、「わが国」というように「わが」という言葉はほとんど使わなかった。この言葉づかいが無意識に示しているように、われわれ日本人は、自分をチョット横において、「日本の国は」とか「日本人は」と少しさめた表現をする。それ故、自嘲的な表現にもなる。

たとえば次の会話（韓国人＝K、日本人＝J）

K「日本人はなぜ、北朝鮮と国交がないのにときどき甘い顔をしてみせるのか」

J「日本人は八方美人だからね」

K「日本が戦争に敗れてアメリカが入ってきたとき、日本人はどう感じたのか」

J「初めは、〝鬼畜米英〟と思っており、日本人もアジアの国々で残酷なことをしてきたので、同じようにひどいことをされると思っていたが、アメリカ人は紳士的だったし、マッカーサーを尊敬する人まで出てきたという話だ。日本人は変わり身が速いからね」

と、傍観者的である。また、この日本人の答えは、「性格」で片づけていて理性的な答弁とはなっていない。日本人的、情緒的、状況的応答である。これも日本的文化であろうか。〝異文化にふれると自分の国の文化がよくみえる〟ということを実感させてくれた。

その後、ソフトボール大会。われわれBグループはベストメンバーと運に恵まれて堂々優勝。ビクトリーパーティーは、他のグループの人も次々と加わり、夜遅くまで飲み、歌い、語った。何のてらいも構えもなく、身も心も解放された気分だった。

2泊3日が非常に短くあっという間に過ぎてしまった。通訳の人のおかげで意見の交換が活発にできたが、予定していた質問もたくさん残している。また、誤解もたくさんあったかもしれない。今回の交流を深めるために、今度会うときは直接お互いの共通した言葉で話したいと思う。

韓国の高校の先生と交流して

田附　和久
東京都・学生

去る88年の7月21日から24日まで4日間、「韓国青年招へい事業」により来日した韓国高等学校教師グループの皆さんと交流する機会を持った。韓国の高校の先生をお迎えする日本側のメンバーはほとんどが韓国側同様高校の先生であったが、私たち東京外国語大学朝鮮語学科の学生も通訳とまではいかないが、多少のお手伝いができればとい

うことで、5名が参加させていただいた。

箱根観光、研修センターでの討論・スポーツ・交流会と、短い期間ながら実に内容は充実していた。

私自身、韓国を訪れる機会も多く、現地の学生たちと交流することはよくあるが、今回のように現場の教育者の方々とお会いすることは珍しく、とてもよい経験になったと思っている。両国の先生とも、実に熱心に教育の問題を考えていらっしゃることが、学生の私にも感じとれた。そして両民族間の将来の関係も教育の問題と深く関わっているのだということを認識できたのは大きな収穫であった。

3泊4日の短い期間ではあったが、共同生活のなかで両国の参加者とも互いに多くのことがわかりあえたようだ。隣国という関係にありながら、私たちはこれまでいかに、偏見にとらわれずに直接話し合ってわかりあおうとする努力を怠ってきたことか。

その一方、短い期間のなかではとてもわかりあえないこともたくさんあったようだ。もちろん、これも当然のことであり、むしろこれからの時代にあっては、このことをきちんと認識することこそが大事になるのだろう。現在は日韓関係も表面上うまくいっているが、本質的に相手は異文化の国で簡単には理解できない部分が多くあるということを忘れてしまっては、友好どころか、前時代の不幸をも繰り返しかねない。

お互いの違いを認識したうえで、誤解や疑問はこれから時間をかけて解いていけばよいのだと思う。そのために話しあえる良き友人は今回こうしてつくれたのだから。

「心の和」を広げたい

中山　英治
東京都・教員

日本史を教えている私にとって、日本と韓国との関係はたいへん興味深いものであり、この合宿セミナーについても、お互いの国やそれぞれの国に対する感情、さらには思考形態を異にする国民同士――それも職業を同じくする者同士が、寝食を共にし顔をつき合わせて、本音で語り合える数少ない機会としてたいへん期待していた。

日韓両国は過去の不幸な歴史上のできごとの影響で、日本においては「近くて遠い国」のイメー

ジが、韓国においては「反日」の感情が存在することは事実であると思う。しかし、私はこの合宿セミナーに参加して、韓国と日本の両国民が相互に理解し、友好関係を深め、お互いに心と心の結びつきを作りあげられる可能性は大であると実感した。

合宿セミナー中、講演、分科会での自由討議、スポーツ大会等が行われ、それぞれたいへん有意義であったが、特に意義深いと感じたのは、交流の夕べの間に東京外国語大学の学生さんに通訳をお願いして、「韓国の人々の反日感情」について韓国側メンバーの1人であるC先生に議論をぶつけてみたときのことである。

お酒が入ってたこともあってずいぶん失礼な質問や発言もした。おわびの気持ちでいっぱいであるが、その時はうわべだけの交流で終わらせたくなかった。C先生は私のぶしつけな問いかけに対して、真剣かつ熱心に答えてくれた。その結果、C先生がどのような感情を抱いたかはわからないが、私は彼の真剣な応対に日韓両国民の心と心の交流の可能性を実感することができた。

今回の親善交流が行われただけで、日韓両国民の相互理解がすぐにかなうとは思わないが、1ヵ月におよぶ今回の交流のほんの一部である3泊4日のセミナーに参加しただけで、少なくとも私と私の周囲の者が韓国および韓国の人々に興味を持ち、相互理解への努力の必要性に目を向け始めたことはまぎれもない事実である。今後もこのような親善交流が継続して行われ、個人と個人の相互理解が周囲へ広まり、日韓両国民の「心の和」が次第に広がっていくことをおおいに期待している。

日韓学生合宿セミナーに参加して

佐藤　みかほ
東京都・学生

隣の国として韓国に興味を持っていた私であったが、数人の韓国人留学生、あいさつ程度の韓国語、韓国に関する2、3冊の本……それが近くて遠い国といわれてきた韓国への私の持ちうるすべてであった。

2度にわたる事前研修ののち迎えた日韓学生合宿セミナー。この企画に参加したことによって私は楽しい思い出とともに、非常に有意義な経験を得ることができた。

このセミナーは、私がかつて参加したことのある国際交流を目的としたパーティー形式の催しとは大きく性格を異にしていた。つまり、私が以前参加したパーティー形式の催しの場合、たいてい自己紹介程度で終わってしまい、深い話をするまでには至らないし、そういうことを目的にしていないこと、また、その場限りで終わってしまい、継続性に欠けること――こうした部分をいつも残念に思っていた。

ところが、このセミナーはスケジュールのメインが討論であり、したがって話し合う時間が十分あった。しかも、自分の興味あるテーマごとにグループが分かれているので、その分深い部分まで話すことができた。加えて、3泊4日という期間を共に過ごすので、人為的でなく、自然に打ちとけ親しくなることができる。このように互いに知り合い、友人となると、その場限りでは終わらない長期的な関係を持つことができるのではないだろうか。

どんな時代、どんな場所にあっても、大切なのは人と人との関係である。このセミナーのような具体的な体験こそ、他の国や民族を理解する一番の近道なのではないだろうか。

日韓友好の一夜

中村　利行
静岡県・学生

「国際交流を問う前に、まず自分自身が、国際人

かどうかを考え、自分に問いかけてみなければならない」、合宿セミナーのディスカッション発表会で、韓国学生の１人から、こういう声が聞かれた。この言葉は、これからソウル五輪を契機として、大きな発展を遂げていくであろう韓国、その韓国を担っていく若者が、真の国際化、国際人を真剣に考え、見つめ直しているということを反映したものであり、私自身にもいい刺激剤になったし、もう１度、国際観を考える良い機会を与えてくれた。

ディスカッションを通してみても、話す言葉の節々に、国家繁栄のための自分の役割や、自国と自分に誇りを持っていることなどが感じられ、感心させられっぱなしだった。そして、この合宿セミナーを通して一番印象に残っていることは、初日の夜に、私たち日本人側の部屋に韓国の男子学生２人を招き、私を含め日本人３人と彼らの計５人で酒を酌み交わしながら雑談をしていたのだが、話が白熱していき、事の成り行きで、日韓関係の話に至ったのだ。

韓国学生の１人が通訳となり、お互いに忌避していた歴史的な話も、徐々に彼らの口から出てきた。私は、まさかこんな場で出るとは……と驚いた。しかし、双方ともこれに関する意見や考えを互いに言いたくもあったし、聞きたくもあったのは確かであった。時のたつのも、酔うことも忘れ、韓国の地図なども広げ、語り合った。話し合っている途中で、今まで実感のなかった歴史的事実が身近なものとなり、なぜそんなことをしてしまったのか、すまないという一語の思いに尽きた。

けれども、ずっと暗々としていたわけではない。結果として、彼らは「過去は過去でしょうがない。これから将来に向けて、私たち若い人同士で、日韓の良い関係を作って、続けていかなければならない」という締めの言葉で最後を飾ってくれ、涙が出るほどうれしく、再度、日韓のために乾杯して、飲み直した。このビールのうまかったこと、

うまかったこと……。お互い心の中にとどめておいたものをさらけ出し、ほんとうにすっきりして寝ることができた。

一生忘れることのできない夜であった。彼らの言ったように、ほんとうに良い関係を未来に向け、若い力で築いていかなければいけないと痛感した。

私の国際交流――1988年版

前田　隆子
東京都・学生

1987年に私の国際交流の初舞台とも言えるフィリピン学生との合宿セミナーに参加して以来、私なりにアジアの国の人々との交流に関わってきた。そして今回、韓国学生との合宿セミナーに参加し、再び貴重な体験を得ることができた。

まずセミナーの準備を通して、いかにわれわれ日本人が隣国についての教育を受けてこなかったかを実感した。今でこそ、ソウル・オリンピックを契機に、韓国に関する情報は手に入れやすくなったが、もっと根本的に知らなければいけないことが忘れられているのではないかと思う。

実際に合宿セミナーが始まると、お互い同年代ということもあって、和気あいあい楽しく４日間が過ぎていってしまった。ディスカッションでは、通訳の人が入ってくれたので、みんな言いたいことを存分に言えたと思う。韓国の人々は、年上に

は「孝」の気持ちを、同年代には「恕」（おもいやり）の気持ちを、年下には「愛し親しむ」気持ちを、という姿勢が幼いころから身についているそうで、こういうことこそ、私たち日本人が素直に学ぶべきところだと思う。

また、韓国の友人の発言で、強く印象に残った言葉があった。それは、

「大学生は知識人ではなく、知性人だ！　わかっただけではなく、実行する人にならなければいけない」

である。日本の学生も韓国の学生も、厳しい受験戦争をくぐり抜けるためには、とかく知識偏重主義に陥りやすい。しかし彼らはそういう姿勢に強く反対する。私は、彼らの学生としての使命感を強く感じた。

〝似ているようで似ていない、だからおもしろい〟という韓国に、今、私はとても引きつけられている。このセミナーを通して知り合った、韓国・日本の友人を一生の宝物として、これからも私なりの国際交流を展開してゆきたい。

日本・韓国学生合宿セミナーに参加して

牧野　雄
東京都・高校教師

1988年8月9日、韓国の学生は1ヵ月のプログラムを終え、成田より帰国しました。日本と韓国は「近くて遠い国」といわれるように、現在につながるさまざまな歴史的な問題を抱えています。

真の友を求めるとき、まず自分を紹介できなければなりません。そして相手の気持ちを理解するために相手のことを知る努力が必要だと思います。

国際交流に参加するとき、これに国という背景を背負わなければならないと思うのです。日本の青年には自分（日本）が彼ら（韓国）にどういうことをしてきたのか、そして今どういう問題を抱えているのかという認識が少なく、その認識不足による問題がいろいろとあることを聞いていました。これは青年に限らず、政治を司る一部の人についても同様のようですが……。

そのため、この東京都世界青年友の会の合宿セミナーでは、事前研修会や定例会において、過去における日韓の関係をしっかり認識し、彼らの持つ文化・社会に基づく国民性を理解し、それを踏まえた上で、現在そしてこれからの日韓関係を考えてセミナーに臨もう、そうでなければ交流どころか大変なことになるという雰囲気があふれていました。

韓国留学生との交流会、ハングル文字および韓国語の勉強会、日韓の問題を取り上げたビデオ上映会、高崎教授による講演会等々。セミナーの前からたいへん考えさせられ、勉強になりました。日本と韓国の関係を、そして彼らの積極的な国民性を知れば知るほど、セミナー当日を迎えるのが逆に怖いくらいでした。

ところが、セミナーでは彼らと十分に話すことができ、セミナーが終わるころには、50人の心の和が実感できました。確かに、彼らは自分の意見をはっきり言い、日本に対する疑問をしっかり聞いてきました。どの分野のグループ討論でも熱が入ったディスカッションが行われており、時間が足りないくらいでした。

私が彼らに一番感じたことは、ほんとうに儒教精神が彼らの行動に自然に染みこんでいることで、心を洗われる思いがしました。自分の主張は熱を込めてはっきり言い、その一方でたいへん礼儀正しくふるまい、実に気持ちよく、日本人が失いつつあるものをしっかり保持しており、見習わなければならないと思いました。ディスカッション、レクリエーション、交歓会、文化交流、3泊4日では足りないという思いでした。

セミナーを終えて、私の心の中では、彼らを通じて韓国が「近くて近い国」に感じることができ、感無量でした。